

高校生ができる地域貢献による地域の活性化

～ハロウィンかぼちゃ（観賞用かぼちゃ）を活用した地域の活性化～

山口県立下関北高等学校

1 はじめに

平成30年4月、響高校と豊北高校が統合し、下関北高校が開校しました。今年度は下関北高校の5期生が入学し、現在は150人の生徒が学校生活を送っています。本校がある下関市豊北町は、豊かな自然と角島大橋など注目を浴びる観光スポットに恵まれる一方で、極端な人口減少、その大きな要因である若者世代の人口流出や少子化、これに伴う地域の活力の低下が大きな課題となっています。

こうした状況の中、本校は、下関北部地域唯一の高校としての期待に応えるため、多様な進路希望に対応するとともに、地域社会の維持・発展に貢献できる人材の育成や高校生ができる地域貢献による地域の活性化といった社会的使命を有しています。そのため本校では、「地域と連携・協働する教育活動の推進により、郷土への愛着と誇りを育むとともに、未来社会に対応できる実践力の育成」をめざす学校の姿として掲げ、地域と連携した様々な取組を進めています。

令和4年度は、まちづくりの推進力となる高校づくりをテーマに、豊北地域で生産振興の取組が進められているハロウィンかぼちゃを活用した地域の活性化に取り組むこととしました。

2 活動の概要・実績

近年、若者の花への関心の低下に伴い、購買量も減少しており、消費拡大に向け、県や花卉農協等は、花育などによる、子どもたちへの“花のある生活空間の習慣化”の取組を進めています。

一方、観賞用のかぼちゃは、ハロウィン文化の浸透により、市場規模は拡大の傾向がみられ、その消費トレンドは、商品の機能重視のモノ消費から体験型のコト消費へ移行しています。

また、県内では、花卉農協によるランタンづくり教室等が行われ、「ハロかぼ」の知名度は向上し、下関市内からの生産供給数が不足しています。近年は、観光など他産業との協働気運もみられます。

さらに、「ハロかぼ」は、露地で省力生産可能であり、花卉農家に加え、野菜農家等の新たな収益補完作物として作付けが可能であり、ランタンのほか、ビール、焼酎、菓子等の加工原料としても活用可能であることから、将来性のある植物です。

こうした中、高校生がハロウィンかぼちゃを実際に栽培し、子ども向けのランタンづくり教室の開催や、地域のイベントにおけるランタンを使ったライトアップなど、「ハロかぼ」の消費拡大に向けたPR活動を行うことは、「ハロかぼ」の生産振興や地域の活性化につながるだけでなく、異年齢の交流を生み出し、教育的効果も期待できることから積極的に取り組むこととしました。

【1】ハロウィンかぼちゃの栽培（8月～10月）

8月5日（金）には、その第一歩として、学校内の畑を活用して、実際にハロウィンかぼちゃの苗作りにチャレンジしました。植え付けた種は、観賞用かぼちゃ「アトランチックジャイアント」を21粒です。本校の卒業生で、下関市豊北町神田上のバラ農家、(有)司ガーデンの中司武敏さんから植え付けの方法についても教えていただき、そのことを思い出しながら種を植えました。

JRC部の生徒は、種まき用の土をポットに入れ、深さ1cmの穴に一晩水につけておいた種を一粒一粒丁寧に植えました。植えたところを軽く手で押さえ水やりをして最初の作業は終了です。“早く芽を出せかぼちゃの種”の思いで、JRC部の生徒は毎朝水やりを行いました。昨年度はナメクジ対策も行い、日々世話をしましたが、天候の関係でかぼちゃの収穫には至りませんでした。「今年こそ！」の



思いで、これから収穫に向けて日々お世話をしました。

第二歩として、8月22日（月）に学校の畑に植え替える作業を行いました。畑には雑草がたくさん生えていたので、除草作業を丁寧に行い、肥料をあげて畑を耕しました。

ポットを等間隔に置いて、本葉になったかぼちゃの苗を植えていきました。無事に花を咲かせ実がなるよう毎日お世話をしていきました。



また、今年植えたかぼちゃ畑の隣で、昨年のハロカボイベントでくり抜いたかぼちゃを鉢に見立てて、パンジーやビオラを植えて畑にならべていたところ、そのかぼちゃからも立派な芽がでて、大きな花が咲いています。実がなるように受粉作業を行いました。8月に植えたかぼちゃとともに大きく育つと期待しましたが、結局実がつかない結果となり、ハロウィンかぼちゃの栽培の難しさを思い知らされました。来年は苗を購入して挑戦しようと思っています。



【2】ハロカボランタンづくり研修会（10月25日）

9月28日（水）に（有）司ガーデンの代表取締役で関の花振興協議会の中司武敏さんをお迎えし、「ハロカボランタンづくり研修会」を実施しました。研修会には本校のJRC部、総合文化部の約30名が参加しました。



研修会では、最初に中司さんから、なぜ、今、豊北町でハロウィンかぼちゃのランタンづくりに力を入れているのか、ハロウィンの起源、かぼちゃの種類、かぼちゃを使った楽しみ方や現在の取組、そしてランタンづくりの手順とポイントについて講習を受けました。また今年度は、ハロウィンイベントだけでなく、クリスマスイベントにも利用できる、デザインかぼちゃの作成を試みているとのことでした。中司さん自身も試行錯誤中で、高校生のアイデアでデザインかぼちゃの作成方法や展示方法などを研究してほしいとの依頼がありました。講習のあとにハロウィン用のかぼちゃを使ってランタンを製作しました。2・3年生は新山口駅のイベントで使用するための、ペイントを施したハロウィンかぼちゃを手際よく完成させていきました。1年生は初めてランタンを作りましたが、先輩に作り方を教えてもらいながら、かぼちゃに油性ペンで下書きをし、引廻しのこぎりやスプーンを使って思い思いのランタンを完成させました。



【3】下関ハロカボプロジェクト in 豊北（10月30日）

「下関ハロカボプロジェクト in 豊北 かぼちゃで学び かぼちゃで遊ぶ！！」が10月30日（日）に開催されました。このイベントはJA山口県下関花卉部会「ハロウィンかぼちゃ専門部」（代表 中司 武敏さん）の主催で実施されました。耕作放棄地対策としてかぼちゃを栽培し、ハロウィンかぼちゃの生産振興を図るとともに、下関北高校の生徒と連携し地域活性化を目的としたハロウィンかぼちゃを使ったイベントを開催することで、かぼちゃの需要の拡大と地域課題（地元ハロウィンかぼちゃの主産地でもある豊北町は人口減少が激しく、観光地付近であっても空き家や空き地が急激に増えています。）の解決のた



めのイベントとなっています。

この日のために、下関北高校は地元の花弁栽培農家の(有) 司ガーデンと連携し、ハロウィンかぼちゃのランタンの展示や麻ひもを使ってハロウィンかぼちゃに見立てたオブジェで装飾した「かぼタワー」を設置しました。

また、会場である土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムとその周辺(空き家・空き地利用)に豊北町がハロカボの町をイメージづけるために、総合文化部が常設の「ハロカボタウン豊北」をイメージした看板を作成し道路わきに設置しました。

当日は天候にも恵まれ多くの来場者がありました。新型コロナウイルス感染症の影響で見送られていたランタン作りが3年ぶりに実施されました。ハロウィンかぼちゃ専門部により指導を受け、ハロウィンマイスターの資格を持つ本校の生徒が、来場者と一緒にかぼちゃのランタンの作成やペイントのお手伝いをしました。来場者の方々は、15分から30分ぐらいでハロウィンかぼちゃを完成させ嬉しそうに持ち帰っていました。また、新米が当たる「かぼちゃの重さ当て」のイベントや、近くに多くのキッチンカーが来て、常に来場者でいっぱいでした。

2018地方創生政策アイデアコンテストで、本校の生徒が提案した「ハロウィンかぼちゃで交流振興・生産振興～角島大橋ハロカボランタンライトアップ大作戦～」が、最優秀の地方創生担当大臣賞をいただきました。角島大橋の欄干に、かぼちゃのランタンを取り付けてのライトアップは、交通の安全面から実現できていませんが、地域の皆さんのご協力もあり、生徒のアイデアを生かす形で豊北町を「ハロウィンかぼちゃの町」にすることは徐々に実現できています。今年で5年目を迎え、生徒はもとより学校関係者も大変うれしく思っています。



3 取組の成果

地域の方からは、「高校生に助けてもらっている」「今度は何ができるのか楽しみ」といったお褒めの言葉をいただき、地域の活性化や地域に貢献する活動を通して、生徒の自己有用感や他者肯定感、学校肯定感、地域肯定感を育み、「ところ」や「ひと」と向き合う取組になっています。

また、生徒自身が、自分たちにできることをやってみようと考えているようになり、小学校の代表児童、中学校及び高校の生徒会が集い、地域を活性化するための方策について熟議を通して考える取組も実施され、その中から考えられた多くのプロジェクトが地域の方の協力で実行されています。地域の活性化のための活動が児童、生徒からの提案で具現化されています。

4 今後の展望

これまでの取組を推進・検証し、その成果や課題を本校の教育活動に反映させることにより、中山間地域の高校に求められ、そうした環境にある高校だからこそ実施可能な地域貢献型のキャリア教育を推進し、これを本校の特色として打ち出していきたいと考えています。